

令和元年6月21日現在

機関番号：32652

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02351

研究課題名（和文）植民地のモダニズム的世界観から大西洋を経て出現する南アフリカ人作家の国家意識

研究課題名（英文）South African Writers' Trajectory: From Colonial Modernist World View to Transatlantically Inspired Sense of Nation State

研究代表者

溝口 昭子（Mizoguchi, Akiko）

東京女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：00296203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：「モダニズムの状況」はポストコロニアル的には「近代国民国家に必要な主権やリベラリズムが欠落した近代（植民地近代）を生き延びる植民地主体の状況」であり、植民地主体の国家意識は必然的に「完全な近代国民国家を希求」する。この研究では19世紀後半のケープ植民地で人種的平等を保障する国民国家に近い制度を経験した南アの白人女性作家Schreinerと黒人作家Plaatjeたちが、その後南アがアパルトヘイト国家への道を進む「モダニスト的状況」に抗して、ボーア戦争や第一次世界大戦を経て表現した「国家意識」の変容を、同時代の米国の白人黒人双方の思想家の「大西洋を越えた」影響と関連させて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

SchreinerとPlaatjeはほぼ同時代で接点もあったが、人種やジェンダーに関連した立場の違いもあり、共通するテーマや思想的背景があるという前提で論じられることが少なかった。それをポストコロニアル的観点から定義されるモダニズム、戦争体験、White Perilという共通項を見出した上で、両者の「近代国民国家への希求」が汎アフリカニズムの影響を受け、植民地主義を内包する西洋近代そのものへの批判や、暴力に苦しむ非支配者間の平和主義的連帯を含むようになったという側面に光を当てた意義は大きく、またPlaatje研究をする上で欠かせないDhomoの国家観も考察しえたことの意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：Colonial subjects had modernism forced on them without the myth of individual or cultural sovereignty. Inevitably their nationalism, in the time of colonial modernity, involved their desire to belong to a modern nation state.

My research, based on this view of modernism, mainly focused on Olive Schreiner, a white female South African writer, and Sol Plaatje (with a reference to H. I. E. Dhlomo), a black male South African writer, who both experienced the nation state-like political system in the Cape Colony in the late nineteenth century that promised the racial equality of all men before the law.

I examined and clarified the trajectory of how these writers, faced with the South African decisive move towards Apartheid (a condition of modernism), articulated their ideas of nation state during and after the Anglo-Boer War and World War I while transatlantically inspired by both white and black intellectuals of America.

研究分野：アフリカ英語文学

キーワード：南アフリカ文学 モダニズム 植民地近代 トランスアトランティック 国家意識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

広い文脈では近年様々な視点から南アフリカ文学のモダニズム的要素を、南アフリカ特有の植民地的近代との関連、そしてアフリカ人作家については彼らがロールモデルと見なしたアフリカ系アメリカ人や汎アフリカ主義との関連で論じる研究が出現している。最新のものでは *Cambridge History of South African Literature* (2012) の第4章 “Modernism and Transnational Culture, 1910-1948” 収録の4つの論文がそれに相当する。一方で Paul Gilroy の *The Black Atlantic* (1993) に触発された論考で、米国の New Negro Movement の南アフリカの New African Movement への影響を論じたものでは Ntongela Masilela の *The Cultural Modernity of H. I. E. Dhlomo* (2007) から *The Historical Figures of the New African Movement* (2014) に至る著作がある。Schreiner と Plaatje 関連では、Laura Chrisman の *Rereading the Imperial Romance* (2000) が両者の植民地的近代への加担と抵抗に関して優れており、彼女の *Postcolonial Contraventions* (2003) や 2 編の Plaatje 論文が収録された Oboe 編の *Recharting the Black Atlantic* (2010) は「黒い大西洋」と Plaatje の関係を明らかにする。その中でこの二人の作家を「南アフリカの植民地的近代に起因するモダニズム」が英国の影響だけでなく米国思想の影響も受けつつ「国家意識が涵養される」という文脈で比較し論じる本研究と方向性が最も近い研究は、1890-1920 年の大英帝国の反植民地主義、民族運動とモダニストたちの繋がりを扱った Elleke Boehmer の *Empire, the National, and the Postcolonial, 1890-1920* (2002) である。しかしこの本では植民地生まれ故の疎外感が作品のモダニズム的世界観を形成したと言われる Schreiner への言及がほとんどない。それは Schreiner が Plaatje と同様に、国を越える移動、進歩主義への信頼、反差別主義という要素を備えつつも、米国との関連が薄い作家とみなされるためである。しかし南北戦争後に Jim Crow 法が整備された米国白人と南アフリカ白人との間に存在した「黒人を押さえ込む」協力関係 (Robert Trent Vinson の *The Americans Are Coming!* (2012) ) や、W. E. B. Du Bois の Schreiner への影響 (Simon Keith Lewis の論文 “Reading Olive Schreiner Reading W. E. B. Du Bois” (2014) ) が近年明らかになったことで本研究がこの新しい分野を説得力をもって意義深いものとして探求することが可能になった。

科学研究費基盤研究 C で「白人政権下の南アフリカで『大英帝国臣民の黒人』が新たに『想像する共同体』」(平成 22-25 年度) について研究を行った際にこの着想に至った。この研究では、Benedict Anderson や Gilroy などの理論的枠組みを見直しつつ用い、Plaatje らアフリカ人知識人(同化政策により選挙権など近代化の恩恵を限定的に享受し、「平等な権利を保証された」大英帝国臣民意識を持っていた)が 20 世紀初頭のアパルトヘイト的政策で諸権利が奪われる中で、進歩的白人、他国の反植民地運動や米国の Du Bois らの提唱する汎アフリカ主義との大西洋を越えた関係を通して、帝国に代わる「想像の共同体」のあり方を模索する過程を明らかにした。しかし、同時に発見したのは、彼らの作品における「進歩した平等な社会出現の前提にアフリカの伝統的共同体崩壊がある」という断絶感を内包した、モダニズム的とも言える世界観であった。そのような世界観と植民地的近代の関係を示したのは Salman Rushdie が *Imaginary Homelands* (1982) で提示した植民地的状況とモダニズムの関係に関する以下の考察である——「植民者と被植民者の接触領域に棲む作家たちは、分断され雑種化し転覆された世界の住民であり、多言語話者にならざるをえず、モダニストという言葉が存在する前からモダニズム(「真実」の相対性)を文化的置換によって強制される」。この考察によって、この世界観が、「アフリカン・ディアスポラの状況と植民地的近代との関係」に関する Du Bois や Marcus Garvey の考察とどう響き合うかについて深い考察が可能になった。そしてさらに、その「植民地的近代」による分断と大西洋を越えた水平な繋がりに生まれる「国家意識の涵養」には白人も関わっていることを研究過程で発見したことで、同時代の共通項の多い白人作家 Schreiner とアフリカ人作家 Plaatje 双方を「植民地的近代に起因するモダニズム的要素」「米国思想の影響」「国家意識の涵養」について比較しつつ論じ、この時代の南アフリカ文学・文化研究に新たな光をあてる可能性を見いだした。

### 2. 研究の目的

19 世紀末から 20 世紀初頭の南アフリカにおいて、急激な産業化とボーア戦争、そして数々のアパルトヘイト法の施行を経験した白人女性作家・知識人 Olive Schreiner とアフリカ人男性作家・知識人 Sol Plaatje は、それぞれが当時経験した植民地的近代特有の断絶、喪失、不安によって形成された一種モダニズム的な世界観を抱えつつも、宗主国英国との関係の変化を意識し、世界特に米国の動きを見据えながら南アフリカの「国家」を想像/創造しようと模索していた。本研究は、このモダニズム的世界観と新しい国家意識との共存に、いかに同時代の米国の白人黒人双方の思想家、作家の国家や人種を巡る社会思想による「大西洋を越えた(transatlantic な)」影響が関わってきたかをこの二人の作家を比較しつつ明らかにするのが目的である。

### 3. 研究の方法

国内での予備調査を経て、夏期に集約的に海外での文献調査(London の British Library および SOAS の図書館および南アフリカケープタウンの National Library of South Africa)を行ない、一次資料および二次資料の閲覧調査・収集作業を実施した。また、Plaatje が執筆した

ものでツワナ語で書かれたものはツワナ語話者に英語への翻訳を依頼した。収集した資料の分類、読解分析を経て「植民地的近代とモダニズム的要素」「米国思想の影響」「国家意識の涵養」という3点を結ぶ理論的枠組みを吟味し再構築した。その際、南アフリカの白人やアフリカ人の知識人・作家たちがアメリカ社会をどう捉え、どのような関係を結んでいたかに関する書籍(文化理論書、歴史書など)を収集し読み込んだ。

このような資料の分析と理論構築に基づき、Schreinerについては初期の作品 *The Story of an African Farm* および死後刊行された *From Man to Man* を対象に「植民地的近代とモダニズム的要素」「米国思想の影響」「国家意識の涵養」との関連で考察した。

Plaatje に関しては、まずその作品理解に欠かせない南アの多言語状況を分析した上で、Plaatje が発行した英語と母語ツワナ語の両方で書かれた新聞(*Koranta ea Becoana*, *Tsala ea Becoana*, そして *Tsala ea Batho*) にて展開された、同胞の間にアパルトヘイトへの批判精神や近代的な国家意識涵養の試みに注目し考察した。同時に彼が母語の書き言葉を白人専門家の手を借りずに確立し同胞に浸透させることで、植民地主義に抗する形での近代化促進を試みたことについて分析を進めた。

このような他言語話者である Plaatje の世界観理解に基づき、彼の作品における「植民地的近代とモダニズム的要素」「米国思想の影響」「国家意識の涵養」というテーマを20世紀前半のアフリカ系知識人の意識の変遷という広い文脈で分析することを試みた。さらに、ボーア戦争と第一次世界大戦の体験が Plaatje の「国家意識」へ与えた影響について、そこに散見される植民地主体独特の modernism 的世界観を考察した。

#### 4. 研究成果

##### (1) Olive Schreiner 研究

“The Life and Death of South African Emerson in Olive Schreiner’s *The Story of an African Farm*” (2016)

この論文では「植民地的近代とモダニズム的要素」「米国思想の影響」「国家意識の涵養」の3点と関連して、Olive Schreiner のアメリカの知識人 Ralph Wald Emerson との関係を、Schreiner の小説 *The Story of an African Farm* (1883) について論じた。特に、Emerson が独立国アメリカ人として持っていた自然観、国民的 identity およびその理想主義から深く影響を受けていた Schreiner が、この作品では彼の理想が南ア(英国の植民地で白人入植地という共通点は持つがアメリカと異なり人口の大多数が非白人である)で機能しないことを露呈していることを明らかにした。また「国民的 identity」が成立せず幾重にも分裂していることがモダニズム的世界観を提示していることも指摘している。

“Transatlantic Re-writing of South African Sexual/Racial Violence in Olive Schreiner’s *From Man to Man*” (2017)

「白人国家」南アフリカにおける「性と人種の問題」に関する Schreiner と Plaatje の作品についての研究に取り組んだところ、Plaatje に関しては、先行研究 *State of Peril: Race and Rape in South African Literature* (2015) が Plaatje の「性と人種」に関する著書 *The Mote and the Beam* (1921) が当時のアフリカ系米国知識人の影響を深く受けていることを明らかにしていることが判明した。そこで Plaatje と比較しつつ Schreiner の死後出版された小説 *From Man to Man* (1926) について、その「性と人種」の表象についてアフリカ系米国知識人 W. E. B. Du Bois の著書 *The Soul of Black Folk* (1903) が与えた影響についてこの論文で分析を試みた。その結果、Du Bois の影響を受けた Schreiner が、この作品では、白人男性による黒人女性への性的搾取および暴力、そしてその結果誕生する子どもという看過できない「黒人と白人が家族として存在する」問題を再検証した痕跡を証明することができた。これは「この作品では彼女がアフリカ人を植民地主義の犠牲者にとらえつつも彼らを生物学的他者として表象している」という従来の見方を覆す分析である。

##### (2) Sol Plaatje 研究

“What Languages Do Aliens Speak? Multilingual ‘Otherness’ of Diasporic Dystopia in *District 9*” (2016)

Plaatje の作品理解に書かせない南アフリカの多言語状況を巡る考察である。現代の南アフリカ映画の言語表象を通して、南アフリカの、書き言葉を含めた「民族ごとに異なる言語」の成立に白人が関与していること、その創られた「差異」がアパルトヘイトにおける分断統治に利用され、さらにバントゥー法によって「民族語教育」が「停滞」の烙印を押されたことを明らかにしている。

「ソル・プラーキのシェイクスピア劇『間違いの喜劇』のツワナ語翻訳『間違いの上の間違い』を巡る政治学」(2018)

Plaatje が母語の書き言葉を「南アフリカの白人専門家」の手を借りずに確立し同胞に浸透させることで、植民地主義に抗する形での彼らの近代化を促進させようとしていたことを論じた。さらに、彼がシェイクスピア劇『間違いの喜劇』をツワナ語翻訳する際に行った改変が、ツワナの言語文化を「近代」にふさわしい形で保存しつつ、コード化された形でアパルトヘイト体制批判を展開する政治的行為でもあったことを明らかにした。

(a) 「『国民未満』から対自的民衆へ——H・I・E・ドロモの作品を中心に」(2018)

(b)国民国家を希求する人びと——南アフリカ人作家 H・I・E・ドローモの劇における国家観の変遷」(2019)

(a)においては、Plaatje が自分の同胞を、自らが啓蒙しケープ植民地で投票権を持つ大英帝国臣民に昇格させるべき「前近代的な国民未満」的存在として表象したことの意味を論じた。特にそこに潜む、彼自身の階級意識が生み出す政治的限界を考察し、アパルトヘイトの状況のなかで同胞を「共闘すべきおなじ人民」と捉えた後の世代の南アフリカ人作家 H. I. E. Dhlomo や Peter Abrahams と比較し包括的に考察した。(b)においては、H. I. E. Dhlomo の国家意識の変遷を詳細に論じることで、当時、起こっていた植民地主義を内包した近代西洋を批判する反植民地主義、パン・アフリカ主義といった移動を伴う黒人公衆圏、西洋近代資本主義に対抗する国際主義としての共産主義という、反アパルトヘイト闘争および国民意識運動を構成する、国際的で横断的なコミュニティの発生が Plaatje を含めた南アフリカ人知識人に与えた影響を包括的に論じている

“Reimagining South African Modernity through the World War in Sol Plaatje’s *Native Life in South Africa*” (2019)

Plaatje がアパルトヘイト根幹法「原住民土地法」(1913)によって土地を奪われた同胞の窮状を英国で訴えた政治エッセイ *Native Life in South Africa* (1915)は、第一次世界大戦への「大英帝国臣民としてのアフリカ人の貢献の可能性(一方でアフリカーナーは潜在的な反逆者)」を主張する書でもある。この論考ではそこに注目し、彼がボーア戦争体験で得た大英帝国(=「想像の共同体」)の一員としての世界観(ボーア戦争へのアフリカ人の貢献が南アフリカ自治領政府に裏切られたにも関わらず)が、アフリカ人の第一次世界大戦への貢献を人種差別主義への移行に抗する形で国民国家を実現する手段としての表象に至らせていることを明らかにしている。当然、彼が表象する第一次世界大戦の戦場はまるでボーア戦争時の勢力図であるかのように意図的に改変がなされているが、そこには彼の帝国への両義的な感情も曖昧な形で表現されている。この近代国家への叶わぬ希求に満ちた彼の戦場表象は彼の歴史小説 *Mhudi*(1930)における戦場表象にも繋がるものである。

“Reimagining Modernity in the Battlefield: Multiple Temporalities in Sol Plaatje’s *Mhudi*” (2019年9月 国際学会発表確定)

Plaatje の歴史小説 *Mhudi* (1930)は、そのナショナリスティックなテーマ以外に、コード化された形でモダニスト的世界観が存在している。それは、個人の自由で平等な人間関係や連帯、移動、そして広く多様な世界への帰属の可能性が、戦争による従来の共同体の破壊を前提にして存在することである。Plaatje が描く植民地化前のアフリカの戦場が植民地主体の近代国家への叶うことなき願いに満ちていることは、西欧のモダニスト的テクストにみられる精神外傷的断絶を伴う戦場と比較するとユニークである。この特異性を性格づけるものは、彼のボーア戦争と第一次世界大戦体験(そこに大英帝国に忠誠を誓うアフリカ人が貢献することが平等な国家を実現すると彼が信じていた)や、後の平和主義やパン・アフリカ主義との関わりである。この論考では、彼の過去への両義的なノスタルジアやパン・アフリカ主義的な未来への希求と関連させて、彼の戦場における「近代性」の再想像/創造を論じている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

MIZOGUCHI, Akiko. “Reimagining South African Modernity through the World War in Sol Plaatje’s *Native Life in South Africa*.” 『東京女子大学英米文学評論』、査読無、Vol. 65, 2019, pp.1-13.

溝口 昭子、「『国民未満』から対自的民衆へ——H・I・E・ドローモの作品を中心に」『多様体』、査読無、No.1, 2018, pp. 193-211.

溝口 昭子、「ソル・プラーキのシェイクスピア劇『間違いの喜劇』のツワナ語翻訳『間違いの上の間違い』を巡る政治学」『東京女子大学比較文化研究所紀要』、査読有、Vol. 79, 2018, pp. 21-48.

MIZOGUCHI, Akiko. “Transatlantic Re-writing of South African Sexual/Racial Violence in Olive Schreiner’s *From Man to Man*.” 『津田塾大学言語文研究所報』、査読無、No. 32, 2017, pp. 9-15.

MIZOGUCHI, Akiko. “What Languages Do Aliens Speak? Multilingual ‘Otherness’ of Diasporic Dystopia in *District 9*.” *Journal of African Cinemas*. 査読有、Vol.8, No. 2, 2016, pp.169-179.

MIZOGUCHI, Akiko. “The Life and Death of South African Emerson in Olive Schreiner’s *The Story of an African Farm*.” 『東京女子大学英米文学評論』、査読無、Vol. 62, 2016, pp.1-21.

[学会発表](計4件)

MIZOGUCHI, Akiko. “Reimagining Modernity in the Battlefield: Multiple Temporalities in Sol Plaatje’s *Mhudi*.” *Modernism and Multiple Temporalities: The Modernist Studies in Asia Network (MSIA)*, 2019年9月12日（於 青山学院大学、東京）（発表確定）

溝口昭子、「20世紀初頭南アフリカ文学における戦争・モダニズム的世界観・国家意識」黒人研究学会例会 2018年10月6日 黒人研究学会（於 立命館大学衣笠キャンパス、京都）

溝口昭子、「『国民未満』から対自的民衆へ—H・I・E・ドロモの作品を中心に」（シンポジウム「カリブ・アフリカ文学と『民衆』」）日本英文学会関東支部第11回（2015年度秋季大会）、2015年10月31日（於 慶応大学日吉キャンパス、東京）

溝口昭子、「Shakespeare 作品のツワナ語翻訳を巡る政治学—Sol Plaatje の *Diphosho-phosho* (1930)の場合」第61回黒人研究の会全国大会、2015年6月27日（於キャンパスプラザ京都、京都）

〔図書〕(計 1件)

溝口昭子 他、作品社『国民国家と文学—植民地主義からグローバリゼーションまで』（共著）（「国民国家を希求する人びと—南アフリカ人作家 H・I・E・ドロモの劇における国家観の変遷」）2019, pp.61-97.

〔その他〕(計 3件)

溝口昭子、「民衆と芸術家」（翻訳と解題）『多様体』、依頼有、No.1, 2018, pp. 179-184.

溝口昭子、「アフリカ人のヨーロッパ人に対する考え」（翻訳と解題）『多様体』、依頼有、No.1, 2018, pp.185-192.

溝口昭子、「演じられる「真実」を切り裂く（『ユビュ王アパルトヘイトの証言台に立つ』寄稿文）『劇場文化』、依頼有、2016, pp.6-8.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。